

# 留学生センターと高大連携：その方向性についての一考察

松村 真樹

キーワード：高大連携

## 1 はじめに

高大連携とは、「高校と大学が、それぞれの教育資源を活用しつつ、連携協力して行う教育活動の総体」である（勝野2004, p.68）。しかし、高大連携の概念には共通の認識がなく、高大連携の名のもとに様々な形態で、多彩な取組が実施されているのが現状である。次節で詳述するように、出前講義、体験入学、オープンキャンパス、入試説明会、研究室訪問などが一般に高大連携として認識された取組であるが、それぞれの内容については、さらに多岐にわたっている。ただ、これらの取組に共通していえることは、大学によって行われる、高校生を対象にした教育活動であるという点であり、さらにいえば、日本の高校生が対象であるという点である。一方、留学生センターは、通常、留学生を対象にした業務を専門に手がけている。確かに、最近になって、学生の送り出し等の日本人を対象にした業務も範疇に入れて、一部にはその名称を国際〇〇センター等に改めたりしている大学も増えてきた。それでも、留学というキーワードを考えた場合、日本の大学進学を考えている多くの高校生にとって、留学はその次のステップであり、高大連携を通じて直接実現につながってくるものでもない。やはり高大連携に参加する高校生にとって、高校の次に来る進路は、日本の大学ということになるのではないだろうか。その意味で、留学生センターが高大連携にかかわる場合、その役割は、高校から大学への橋渡しという、従来、学部が担ってきた高大連携における役割とは若干意味合いが異なるものになるだろう。

今回、筆者が勤務する長崎大学留学生センターにも、初めて高大連携の依頼があり、長崎県内の高校に出前講義を行った。本稿では、筆者自身が行った高大連携の体験をもとに、留学生センターが実施する高大連携の方向性を

考察してみたい。

## 2 高大連携の意義と形態

平成11年（1999）に出された中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」において、後期中等教育と高等教育との接続に関する具体策が提示され、それ以降、いわゆる高大連携が様々な形で実施されるようになった。高大連携の意義は、高校にとっての意義と大学にとっての意義の両方がある（原2006, p.6）。高校にとっては、より高度で専門的な学習によって教育活動を補完し、生徒の学習に対する意欲や目的意識を高め、適切な進路選択を支援することにつながる。他方、大学にとって高大連携は、社会・地域貢献であり、受験層開拓を含む広報効果などの機能を果たす。また、高校教育の現場を知り、現状に対する理解を深めることを通じて、大学における教育体制の見直し及び充実につながることも期待されている。

高大連携の形態については、勝野頼彦（2004）の『高大連携とは何か』で詳しく類別、説明されている。以下、同書に拠りながら、高大連携の形態をまとめてみたい。それによって、留学生センターによる高大連携への貢献の位置づけが明確になるとと思われるからである。

勝野によれば、「高校生を対象として、大学の教育資源を活用して行う高校の教育活動」としての高大連携は、狭義の高大連携を意味する。これに対して、「高校と大学の連携による、高校教育及び大学教育の改善充実に資する取組」を意味する広義の高大連携も存在する。多くの高校や大学で実施されている高大連携は、前者である。したがって、ここでは狭義の高大連携に絞って、さらにその内容を見てみよう。

まず、文部科学省の『高等学校教育の改革に関する推進状況』による高大連携実施調査では、①大学における学修の単位認定、②大学の科目等履修生や聴講生・公開講座等の活用、③大学教員による高校での学校紹介や講義等の実施、という3つの連携方法が報告されている（勝野2004, p.14）。このうち、①と②は高校生が大学に出かけていく場合、③は大学教員が高校に出向いていく場合である。また、①と②の違いは、①では学校外の活動として高校が単位を認定するが、②では活動の成果が単位認定の対象にならない点にある。内容的には、①では大学での語学、専門分野の基礎や教養的な科目を

履修し、②には体験入学やオープンキャンパス、公開講座などが含まれる。最後に③は、高大連携のなかで最も普及している取組と思われるが、大学講義の入門的なものや進路ガイダンスについての講演会、模擬授業や出前講義、そして大学説明会のようなものである。

上述の文科省の分類を出発点として、勝野は彼自身が高校に対して行った聞き取り調査に基づいて、高大連携の形態を4つのタイプに分類している。最初のタイプは、高校生が科目等履修生や聴講生として、大学の通常の講義を聴講するものである（Aタイプ）。これは、上述の文科省分類の①に相当するもので、大学における学修が高校で単位認定される。第二に、大学が高校生のために特別に企画した講義や講座に参加するものがある（Bタイプ）。大学が「高校生のために特別に企画する」点が、Aタイプと異なる点であるが、その実施形態は、オープンキャンパス、夏季集中講座、サマーキャンパス、高校生向け公開講座、大学開放講座、特別講義など多岐にわたる。第三のタイプとして、大学が主催する大学説明会、研究室訪問、施設見学がある（Cタイプ）。この場合は、進路指導の一環として、大学の概要や大学生活の様子を紹介することを目的としており、内容的には、Bタイプほど専門性が高くない。最後に、高校の課題研究の一環で、生徒や教員が大学に出向き、実験、実習を通じて個別指導を受けるものもある（Dタイプ）。専門性の高い教育内容という点では、Aタイプに共通するものがあるが、継続的に大学に通うわけではないので、通常の授業を聴講・履修するAタイプとは異なる。

このように、現在、高大連携として具体的に実施されている活動は多彩である。その中で、留学生センターに関連した実施形態としてはどのようなものが考えられるだろうか。まず、高校生が大学に来る場合を想定してみよう。留学生センターの主要教育業務は留学生に対する日本語教育であるが、一般の高校生がそうした日本語授業を聴講しに来る可能性はない。一方、高校生の興味を引くような研究を行っている研究機関ともいえないので、研究室訪問も現実的ではない。そのかわり、教室訪問と称して、留学生に対する日本語授業を見学することは可能かもしれない。それがどの程度、「高校における学習を補完する」ことになるかは疑問であるが、将来日本語教員になることを志している高校生に対する「進路指導の支援」にはなるかもしれない。最後に、留学生センターは入試に直接かかわる機関ではないので、進学説明会的な高大連携も専門外の分野であろう。

逆に留学生センターの教員が高校に出向いていく場合はどうであろうか。その場合は、一般的に行われている出前講義、あるいは講演の形式をとることになるだろう。ただし、同じ出張形式でも、留学生センターが実施できる高大連携には、「講義型」と「交流型」の2種類があると筆者は考える。前者は、他の学部が実施しているような、通常の出前講義や講演会の形態をとりながら、異文化や国際社会、地理学及び人類学的地域研究の一端や、あるいは身近な留学生の生活状況を紹介しながら異文化適応について説明するものである。さらに、海外留学の手引的な進路ガイダンスをこれに含めることも可能であろう。

他方、留学生センターが日ごろ接している留学生と高校生との交流の場を提供するような形で実施される「交流型」の高大連携も考えられる。すなわち、異文化理解や国際コミュニケーションのための体験型高大連携である。ただし、こうした交流型連携事業では、参加人数のバランスや、高校の英語科との連携であれば、英語を使った交流が可能なように、留学生の出身国に配慮する必要があり、出張講義の場合とは異なる準備や連絡調整の努力が求められるだろう。

今回の本学留学生センターによる高大連携は、高校側の意向により、「講義型」の高大連携になった。留学生センターにとっての高大連携の意義は、地域貢献、特に地域の国際化や国際理解推進への貢献にある。また、本学留学生センターが実施している短期海外語学研修について広報することは、それを目的に本学に入学を希望する高校生への「大学説明会」的な役割も期待される。今回の高大連携はこうしたことを念頭に準備された。次節で、その内容を紹介する。

### 3 長崎大学留学生センターによる高大連携の試み

今回の高大連携は、2009年10月29日に長崎県立西彼杵<sup>そのぎ</sup>高校で実施された。同校は、在籍者数317名（平成21年度）の普通科高校である。長崎県高等学校事務局を通じて、4月に本学へ「平成21年度派遣希望一覧」が送付され、そのなかで、県下の24校から、本学教員計140名の派遣希望があった。高校によっては、本学にある8学部のうち、全学部もしくは複数の学部から、それぞれ1名程度の教員を招いて多彩な高大連携事業を展開している高校もある。留

学生センターに対しては、西彼杵高校から、異文化についての理解を深める目的で、国際協力活動の紹介や異文化理解における留意点などを説明する80分間の講義の依頼があった。ちなみに、同校の場合、本学の他部局への派遣依頼はなく、初めから留学生センターの教員による「異文化理解」のための出前講義だけを平成21年度の高大連携事業として計画していた。

7月に、高校側の高大連携担当者から講師に連絡があり、具体案についての連絡調整が始まった。最終的に、留学をキーワードにおき、留学生センターの業務（特に留学生の受け入れと支援、そして日本人学生用短期語学留学プログラムの運営）を事例に挙げながら、「留学と異文化理解」という題目に決定した。しかし、単に業務を紹介するだけでは、「講義」にはならない。そうした業務内容を紹介しながら、高校生に対して伝えるべき、何かメッセージのようなものが必要となる。

高校生に対して「留学と異文化理解」という講義を準備するにあたって、2冊の本のタイトルが筆者の頭に浮かんだ。ひとつは、海部未知著『パラダイス鎖国一忘れられた大国・日本』である。一昨年、NHKの討論番組の中でも取り上げられたこの本の趣旨は、日本人、特に若い日本人が以前のような海外への自然な憧れを持たなくなっているという危惧である。海外への関心の薄さの理由として、日本はすでに多くの外国よりもずっと便利で清潔で暮らしやすい国になり、「日本にいたほうがいい」と考える若者が増えて、最初から「海外に出る」という考えすら浮かばなくなっていることが指摘されている。その結果、「海外を目指せ」と叱咤激励されても、当の若者からは「なぜ、そんなことをする必要があるの」という答えが返ってくることになるらしい。この本の著者は、こういう状態がさらに進めば、日本は別の意味での鎖国状態に陥ってしまうかもしれないと警告する。

他方、二冊目のタイトル、栄陽子著『留学で人生を棒に振る日本人』は、留学しても英語力不足で結局大学に進めず大学内の語学学校だけで終わっている日本人の例や、自分でよく下調べをしないで留学して悲惨な目に遭ってしまった日本人の例を挙げながら、巷の留学エージェントが示すバラ色のような留学生活のイメージに対する憧れだけで留学して、「人生を棒に振る日本人」が多いことに警鐘をならしている。

このように、日本は経済的にも豊かになり、一方で簡単に留学できる制度が増えているなかで、安易な気持ちで留学する日本人が多くなり、その結果、

事件やトラブルに巻き込まれるケースが増えていることに対しても注意を喚起することが重要である。筆者も、短期留学プログラム生のコーディネートや日本人学生の豪州短期英語研修の運営にかかわる経験から、最近、留学先や留学内容についての予備知識をほとんど持たず、安易な気持ちで留学をする学生を目にすることがある。この点は、留学する本人に限らず、安易な考えで留学を紹介、奨励、あるいは斡旋したりする側にも問題がある。

以上のような両極端の状況、すなわち海外に出ること自体を最初から否定する状況と、危険なほど安易に海外に行ってしまう状況の両方を念頭に置きながら、異文化理解における留学の役割を説明することが、今回筆者が行った出前講義の課題となった。言いかえれば、高校生に対して、海外に関心を持つことの重要性を説くと同時に、留学の明るい面だけを強調する無責任な留学奨励論に陥らないような講義を目指すことである。

講義の概要は、①わが国の留学生、②長崎大学の留学生、③留学生を受け入れるということ、④日本人の海外留学について、というオーソドックスなものになったが、その中で上述の課題をできるだけ盛り込むように努力した。まず①及び②では、文部科学省が毎年発行している『我が国の留学制度の概要』と本学のデータを使って、日本全体の留学生数、長崎県の留学生数、そして本学の留学生数を比較してみた。さらに、日本に留学してきている高校生の数についても紹介した。長崎県には、1,200名ほどの留学生が在住しているが、そのうち350名程度が本学で学んでいる。すなわち、それより圧倒的に多くの留学生が県内の他大学に在籍しているという事実は、講演を聞いた高校生の興味を引いたみたいである。次に、③では留学生センターの業務の一部である日本語教育及び留学生の就学・生活相談業務を通じて、本学で学んでいる留学生がどのような生活をしているのかを紹介した。最後に、④日本人の海外留学について、さまざまな留学のタイプを紹介した後、本学が5年前から始めた短期語学研修の紹介や、学術交流協定に基づく交換留学制度について説明した。

講義終了後、参加した高校生からは、留学するときに知っておくべきことや留学において最も苦勞することは何かという質問が出た。また、留学生は日本のどんなところが好き、又は嫌いかを尋ねる生徒もいた。さらに、留学した先で偏見や差別に遭わないのか、といった質問もあった。

今回の出前講義を通じて、「日本在住の留学生について知ることは異文化理



解の第一歩」や「海外に目を向けることは大事なこと、留学はその一手段、でも安易な気持ちで留学してしまうのは問題」という筆者のメッセージが高校生にどのように伝わったのだろうか。出前講義を受けた高校生の感想が送られてきたので、最後にその抜粋を紹介してみよう。

生徒A 「現代の日本は国際化社会の傾向が強くなり、外国人を見ることが多くなってきています。しかし今回の講義で、若い人の間で外国への関心が減ってきている“パラダイス鎖国”現象が進んでいると聞き、私もそういう傾向があるので、納得することが多々ありました。」

生徒B 「私は留学に興味があります。英語をマスターしていろんな人と接したいです。(中略) 今日話を聞いて視野が広がりました。もし、留学することが決まったら今日話を活かして、その国で役立てたいです。夢に向かって勉強をがんばりたいと思います。」

生徒C 「日本人は異文化をあまり認めていないように感じます。今日話を聞いて、私はその考えを改めるべきだと思いました。もっと心を開き他人を認めるべきだと思いました。(中略) 日本の国だけで満足してしまうのではなく、もっと外の世界へ視野を広げて、広い世界を見てみようという気持ちがますます大きくなったように感じました。そのためには、共通語である英語というものは不可欠であるとあらためて感じました。日本人だから英語は必要ないというマイナスな気持ちで授業を受けているときもありました。しかし、そうではなく、将来のため、もっと英語を学んで活用していけたらいいなと思いました。」

これらの感想を読む限り、今回の高大連携は、高校にとっての高大連携の意義のひとつと考えられている「高校生の学習に対する意欲や目的意識を高める」ことに貢献したといえるのではないだろうか。

#### 4 今後の課題

原(2006)は、高大連携の課題として、①個々の専門分野の単発的、表面的な紹介にとどまりやすいこと、②高大連携に対する高校と大学の間の意図や目的、位置づけの齟齬、③特定の教員への偏り、④大学側からの一方的な教育資源提供になりがちなことの4点をあげている。この中で、今回の高大連携を通じて、筆者が特に感じたのは①と②である。

まず、①については、出張授業の場合、生徒の負担も軽く、多くの生徒が参加できる反面、そうした授業は、内容的にも、また構成上も1回限りの講演のようなものになってしまうことは避けられない。たとえ内容をもう少し専門的にして、例えば「異文化間コミュニケーション」の論理や方法を講義するようなものであっても、それが1回限りの出張講義の形態をとる以上、その分野の表面的な紹介に終わる可能性は高い。

次に、②高校・大学間の連絡調整については、できるだけ早い時期から連絡を取り合って、高校側の意図や目的を確認しておくことが重要であると感じた。特に、既存の授業科目の内容を紹介するのではなく、講演形式で実施する場合は、対象となる高校生がどのようなテーマに関心があるのかをあらかじめ把握しておきたいという気持ちは、すべての講師に共通するものではないだろうか。

また、「交流型」の高大連携を実施する場合は、留学生を参加させる関係から、参加する高校生の人数や使用する教室の広さなどもあらかじめ打ち合わせておかなければならない。さらに、高校側の意図が英語を使った交流ということであれば、英語が母語であるか、それに近い留学生の参加が望まれる。そして、交流の方法も、単なる「顔合わせ」ではなく、それを通じて相互理解を高めるための様々なアクティビティを高校と大学が共同で企画し、準備しておく必要があるだろう。

今回、高校側から本学留学生センターに対して高大連携の依頼があったことは、従来、留学生にとっての日本への窓口であった留学生センターも、グローバル化と共に、日本の高校生にとっての世界への窓口的役割を期待される時が来ていることを反映しているようにも思われる。また、大学が実施する高大連携が、これまで以上に内容の多様化が求められる方向で拡大・進展していることのあらわれかもしれない。高大連携の今後のあり方を検討していくにあたって、本稿で紹介した経験が少しでも役立つことを願いたい。



参考文献

- 勝野頼彦 (2004) 『高大連携とは何か—高校教育から見た現状・課題・展望—』  
学事出版
- 海部美知 (2008) 『パラダイス鎖国—忘れられた大国・日本』 アスキー新書
- 栄 陽子 (2007) 『留学で人生を棒に振る日本人』 扶桑社新書
- 原 知章 (2006) 「高大連携の現状と背景」『静岡大学人文学部高大連携プロジェクト報告書』 (pp.3-8、静岡大学人文学部社会学科)

(留学生センター准教授)